

国会図書館本『源仲正集』の編纂態度

— 誤入歌を手がかりとして —

山崎 真 克

源仲正は、白河・鳥羽兩院の院政期、藤原頼季、また源俊頼、藤原基俊らが歌壇の中心となっていた時期に活躍した歌人である。その和歌については、これまで萩谷朴氏、神作光一氏、井上宗雄氏によって、用語が珍しい、やや諷刺的な詠み口である、といった評価が与えられているようである。稿者は六条家頼昭の和歌にみられる珍奇な用語に興味を覚えて、同様の指摘がなされる曾禰好忠、源俊頼の和歌からの影響の検討を進めている。そこでさらに同様の性格を持つ源仲正の和歌をもこの検討のうちに加えようというのが、本稿の出発点である。

こうした好忠、俊頼、仲正の三人の和歌に同一の傾向を見出すというのは、稿者ひとりの考えではないようで、岡山大学付属図書館に『三勇和歌集』なる歌集が存在している。これについては、享保元年（一七一六）九月に法橋式炊翁が三人の和歌を抄出し、簡単な

注を施したもの、といった紹介が、神作氏及び片岡智子氏によってなされている。三人の歌人が生きた時代からは大きく下った江戸期の成立であるが、一つの享受姿勢が伺われて興味深い。

仲正歌にみられる用語を検討し、頼昭歌との影響関係を考察するところからねらいはあるのだが、その準備段階として、先学の研究成果に多くは抛りつつ仲正歌の集成を行ったところ、四〇八首の詠歌を得た（36ページ付表参照）。そこで本稿では、これまでその存在が指摘されるにとどまっていた誤入歌を手がかりに、国会図書館本『源仲正集』の編纂態度を考えてみたいと思う。

二

『私家集伝本書目』にみえる国会図書館、彰考館文庫蔵の二本の『源仲正集』は、前掲の神作氏によって詳しく紹介され、初句索引付きで全文の翻刻もなされている。近世末期の書写で、四季、恋、雑の部立からなり、いずれにも歌合、勅撰集、私撰集等にはみられない独自の歌を所収する、と指摘されている。国会図書館本（以下、国会本と略す）には重複八首を含む全二四一首中三〇首、彰考館文庫本（以下、彰考館本と略す）には全二〇一首中三首の独自歌があるとされるが、稿者の調査では国会本十五首、彰考館本三首という結果になった。この差は、今回得られた仲正歌が神作氏の集成より若干多くなっており、また氏が「為忠家兩度百首」と国会本にだけみられる九首を考慮に入れておられないことに起因するものと思わ

れる。彰考館本の三首はすべて国会本の十五首の中に含まれるので、当方は国会本だけに対象を絞って考えていくことにする。

井上氏は前掲著書において、この国会本「源仲正集」について次のように述べておられる。

国会本「仲正家集」は夫木抄の歌が中心で、丹後守為忠家百首や撰集類の歌若干を加えたものであり、誤って他人の歌や永久百首の歌なども載せている。末尾に小大君の歌がある。

神作氏が独自歌と言われるのは、今私に傍線を付した部分にあたるものだと思われる。つまり、今回得られた十五首の歌は厳密には仲正の歌と認められず、いずれも他人詠或いは錯誤により加えられた歌なのである。この十五首を仮に誤入歌と称することに、これらが国会本「源仲正集」に収められた理由を考えてみたいと思う。

三

神作、井上両氏の指摘される通り、国会本「源仲正集」では「夫木抄」にみえる歌が約九割を占めている。その中には、「夫木抄」の書写段階で生じたであろう誤りをそのまま踏襲しており、同書から抄出したことが明らかな例が存する。

○夫木抄 卷第三十五 雑部十七 総角

後京極撰政治家卅首歌合

定家卿

二七四 あけまきはあとたにたゆる庭もせにをのれむすへとしける夏

草

家集、女郎花

源仲正

二六四 こまにかふ草のなかなるをみなへしをのれむすへとしける夏
草 [静嘉堂文庫本・宮内庁書陵部本]

◎源仲正集 秋

女郎花

二六八 駒にかふ草の中なる女郎花おのれむすへとしける夏くさ

静嘉堂本・書陵部本は、書写の際に目移りによって、前に位置する定家の歌（「拾遺愚草」下三三）の下句を混入させてしまったもので、永青文庫本にある「かりてつかめるしつのおけまき」が正しい形だと思われる。

○夫木抄 卷第三十二 雑部十四 箭

正治二年百首

源仲正

二五三 わかこひはくるりはなかつかはのせにたちぬるとりのあとはか
かもし

源師光

二五三 あつさ弓ともやたはさみもろ人のおのかひきくいとむなる
かな [静嘉堂文庫本]

◎源仲正集 恋

正治二年百首恋

二四四 わか恋はくるりはなかつかはのせにたちぬるとりのあとはか
もなし

静嘉堂本は、書陵部本・永青文庫本にあるように、仲正歌の詞書が

「家集、寄水鳥恋」、師光歌の詞書が「正治二年百首」であったもの（正治初度百首三七五）を、一つ前にずらした形で誤写したものとと思われる。前例と合わせて「源仲正集」はこうした「夫木抄」の誤りを踏襲した形になっている。以上のことから、「源仲正集」の本文と「夫木抄」の本文とが密接な関係にあることは明らかであろう。

四

国会本十五首の誤入歌のうち、約半数にあたる八首が「夫木抄」に見出せる。前述したことから考えても、恐らく「夫木抄」から抄出されたものであろう。まずこれらについて、誤って所収された理由を考えてみる。

①源仲正集 春の部

さくら

翌 まごちふく花のあたりの風下は時そともなく雪をつみける

・夫木抄 卷第十九 雑部一 風

北ごち 簾中雪

源仲正

主翼 きたごちにけぬのとこまてとほりつるご雪はみすのふるふ也

けり

△国会本 一五〇

まごち 永久二年百首、落花

主望 まごち吹花のあたりの風下は時そともなき雪をつみける

〔静嘉堂文庫本・宮内庁書陵部本〕

②源仲正集 秋

秋刈田

三三 あし原のかり田の面にはひいて、いなつきかにも世をわたるらん

・夫木抄 卷第二十七 雑部九 動物部

海月 家集、恋歌中

源仲正

三三 我恋はうみのつきをそ待わたるくらけのほねにあふ夜ありやと

（二首略 作者表記「同」）

△国会本 一八〇

（蟹） 三島社奉納歌、神楽、篠波

三三 莞 あしはらのかり田のおもにはひちりていなつきかにもよをわたらん

たるらん

〔静嘉堂文庫本・宮内庁書陵部本〕

永育文庫本・寛文五年版本にはそれぞれ「仲実朝臣」、「権僧正公朝」と作者名が明記されている。これが脱落していたため、仲正歌と誤認したものであろう。②の例のように、同じ作者の詠が続く場合には、普通「同」と表記されるのだが、それが無いにもかかわらず仲正歌と認めたものと思われる。

③源仲正集 秋

（しか）

三三 秋ののかりねのをかにすむ鹿のわれからことし物おもふかな

な

・夫木抄 卷第二十一 雑部三 岡

題しらす かりねのをか 国末勸之 源仲正

六五 秋の野のかりねのおかにすむ鹿のわれからことしものおもふ

哉

家集恋歌中

同

六六 わきもこやくれかおかのふるき、すかりにもあはて年のへ

ゆけは

〔宮内庁書陵部本・寛文五年版本〕

△国会本 一三五▽

静嘉堂本・永青文庫本は二首の作者をそれぞれ「読人不知」、「源仲正」とする。これは、「秋の野の」の歌の作者名を「源仲正」とする『夫木抄』の記載をそのまま踏襲したものであろう。

④源仲正集 秋

は、その落葉

二五 ちりかゝるは、そのしたにふす鹿のうへは夏げの心ちこそす

れ

・夫木抄 卷第十六 冬部一 落葉

同〔安元々々年十月右大臣家歌合落葉〕 源仲正

六八 散かゝる梓の下にふすしかの上は夏毛の心ちこそすれ

〔宮内庁書陵部本・寛文五年版本〕

静嘉堂本・永青文庫本は作者名「源仲綱」とする。この歌合には証本が現存し、これは仲綱歌であることが確かめられる。こうした「仲正」と「仲綱」との混同は他にも例がある。

○夫木抄 卷第三十三 雑部十五 車

みつくるま 承安三年七月右大臣家歌合水月

源仲正

一五四 はやきせにやとれる影をくみあけて月のわかくる水くるま哉 作者名については三本ともに異同が無いが、詞書にみえる歌合名および歌題から「仲綱」の誤りとみるといるのが、萩谷氏はじめ諸氏の意見の一致するところである。これは国会本に二六番として採られている。名前の類似のためか「夫木抄」が既に誤っていたものを、

③と同様にそのまま踏襲したのであろう。

⑤源仲正集 夏

夏蝉

六 夜と、もにもえこそあせねむかはきのかたそひもなくさみた

る、比

・夫木抄 卷第三十二 雑部十四 驟行

家集、五月雨

源仲正

一五四 夏野ふむせこかむかはきすそくちてほすひまもなくさみた

る比

△国会本 一七▽

恋歌中

同

一五五 よとともにもえこそあせねむかはきのかたかほまなきこひを

のみして

これは他人詠ではなく、錯誤によって加えられた歌である。『夫木抄』から「よとともにもえ」の歌を採る際に、第四句目の中程で目移りが生じて、前の歌の末部を混入させてしまったものと思われる。

以上の五首については、『夫木抄』との関わりによって誤りの理

由が説明できるのだが、残りの三首は、恐らくは「夫木抄」からの抄出であろうと思われるものの、諸本に異同なく、仲正とは別の作者が判明しており、はっきりとした理由が見出せない。

⑥ 源仲正集 春の部

帰雁

三六 つらなれる翅をかけて玉章のもしくさりしてかへる雁かね

△夫木抄三六三 信実朝臣 百首歌合建長八年三三△

⑦ 源仲正集 夏

卯花

空 おとたてぬせきりの浪とみゆる哉みなせの里にさける卯花

△夫木抄三五 読人不知△

⑧ 源仲正集 夏

鶉川

四 うふねおほくくたすをりしも瀧川のやなくつれしてあゆこさ

はしる △夫木抄三三 神祇伯頼仲 永久百首三三△

五

次に、「夫木抄」に見出せない七首の歌について検討する。これらは、「夫木抄」以外の撰集資料を想定しうるものである。

⑨ 源仲正集 秋

七月八日に夕かたまでこむといひて侍けるに雨ふりければ

はまでこて

二三 雨ふりて水まさりけり天の河こよひはよそにこひんとやみし
・後撰集 巻第五 秋上

ふん月の七日にゆふかたまでこむといひて侍けるにあめ
ふり侍ければまでこて 源中正

三七 雨ふりて水まさりけり天河こよひはよそにこひむとやみし

これは「後撰集」に三首の和歌を残す「源中正（なかつた）」を、
名前の類似によって「仲正」と誤ったものである。同様の例に次の
ようなものがある。

〇二八要抄 戀歌四 (統群書類従第拾四輯上)

またとしわかゝりける女につかはしける 源仲正

葉をわかみほにこそ出ね花薄したの心にむすみさらめや

これは「後撰集」巻第十恋二六四番に「源中正」の歌として載るものである。「二八要抄」だけなら単なる誤写とも考えられるが、国会本「二七番としてこの歌がみえることから、少なくとも国会本編者は二人を混同していたと言えるはずである。また神作氏も指摘されているが、国会本の識語にあたる部分に、本文とは別筆で、

源 仲 正 大五 歳 少 時 守

近院右大臣孫大藏大輔當年男

源 仲 正 別

とあるのは、「中正」の系譜を述べた記事であって、これもまた後人による同様の誤りであろうと考えられる。

⑩ 源仲正集 春の部

いぬさくら

四三 山さとのこてらにさける犬桜おいはなたれて引人もなし

・為忠家後度百首 春 桜廿首

(山寺桜) (仲正)

一五 やまかつのこてらにさけるいぬさくらはなのかすとはおもほ

えぬかな

・夫木抄 巻第四 春部四

おもふ事行ける比、大式長実卿のもとへつかはしける

同(俊頼朝臣)

一四 山かけにやせささらほへる犬さくらおひはなたれて引人もなし

△散木奇歌集第一 春部二V

「犬桜」という語が共通しているために、「夫木抄」の俊頼歌の下句を混入させてしまったものと思われるが、「為忠家後度百首」の歌は「夫木抄」にはみられず、このままでは隣接に起因する目移り

とは考えにくい。或いは国会本の詞書のように「犬桜」題のもとに二首が並んでいた類題集のようなものが想定できるかもしれない。

以下のものは、井上氏の指摘される小大君の歌を含めて、所収された理由がはっきりしない。⑩の例は、詞書に「堀川百首」とあるから恐らく直接抄出したものである。或いは名前の類似によって誤ったとも考えられる。

⑩源仲正集 恋

堀川百首

一六 はふりにこにみわすゑさせていのれとも君か心のわれによらは

や △堀川百首 恋二三 仲実V

⑩源仲正集 雑

偷児

三三 ぬす人といふもことわりさよ中に人のこゝろをとりにきたれ

は △三奏木金葉集卷第八 恋下五三 題読人不知V

⑩源仲正集 雑

(雑のうた)

三三 このほに露かけすとも思ひやれいひおくほとの有世しらぬ

と △小大君集六V

三四 玉のをのかたいとなればたえぬへしたゆれば露も玉らさりけ

り △小大君集五V

三四 ふらぬよの心もしらして大空の雨をつらしとおもひける哉

△小大君集三〇 拾遺抄第八 恋下三三V

六

以上の検討を踏まえて国会本編者の編纂態度を考えてみる。撰集資料としては、従来指摘のあった仲正歌のみえる歌合、勅撰集、私撰集(特に「夫木抄」)等に加えて、「後撰集」、「堀川百首」、さらに類題集のようなものを想定しうる。いずれも作者名表記に頼った収集を行っており、撰集資料に誤りがある場合にはそれをそのまま踏襲し、また自らも名前の類似等による誤りを犯している。さ

らに「夫木抄」について言えば、書陵部本系統の本を資料にしていた可能性が高いが、反証もままみられ、編纂当時の版本等の流布状況を確かめないことには俄には決めがたい。

いずれにしても、正確な知識は持たないながら、いろいろな資料からかなり幅広く仲正歌を集めようとした態度は何われる。㊦の小大君の歌三首は、こうした態度で集めたものの、仲正歌として疑問が残るので存疑として末尾に置いたのかもしれない。

また国会本が八首の重複歌を有することについて、神作氏は前掲論文において「精撰本ではなく、いわゆる未定稿的性格を持」つとされるが、重複歌はすべて詞書を異にしていることから、編者は明確な意図を持ってそれらを配したものと考える。こうした詞書の問題も含めて、今後さらに検討を深めていきたい。

〔注〕

- (1) 萩谷朴氏「平安朝歌合大成」第五、六、七、八、九卷（私家版 昭36〜昭41）、神作光一氏「源仲正とその家集について」（言語と文芸55 昭42・11）、井上宗雄氏「平安後期歌人伝の研究」増補版（笠間書院 昭63・10）、また松野陽一氏「藤原俊成の研究」（笠間書院 昭48・3）、久保田淳氏「新古今歌人の研究」（東京大学出版会 昭48・3）も仲正歌にふれる。
- (2) 注1神作氏論文、片岡智子氏「岡大本」「三勇和歌集」について」（岡大國文論稿2 昭49・3）。

- (3) 神作光一氏「源仲正集翻刻・初句索引」（王朝文学14 昭42・6）。以下、「源仲正集」の本文及び歌番号はこれに拠る。

(4) 国会本三は「統詞花集」五にみえる類行歌なのだが、詞書にそれが明示してあるので誤入歌とは認めない。

(5) 注1井上氏の著書 三三三頁。

(6) 「夫木抄」の本文は、静嘉堂本を底本とし、書陵部本・北岡文庫本（＝永青文庫本）との異同を掲げた、山田清市・小鹿野茂次氏の「作者分類 夫木和歌抄 本文篇」に拠ったが、書陵部本・永青文庫本についてはそれぞれ図書館叢刊の翻刻、細川家永青文庫叢刊の写真複製により確認した。また、寛文五年版本は便宜上国書刊行会本を用いた。歌番号は新編国歌大観に拠る。以下、和歌の引用に際しては、特に断らないかぎり本文・歌番号ともに同書に拠った。但し、濁点等は私に改めた場合がある。

(7) 詞書にみえる「家集」は、「夫木抄」が撰集資料とした原家集であり、現存する二本の「源仲正集」とは別のものである。

「桑華書志」所載「古蹟歌書目録」（太田品二郎氏 日本学士院紀要12―3 昭29・11）にみえる「仲正家集」は現存しないが、或いはこれを指す可能性もある。

(8) 安元元年（一一七五）十月右大臣家歌合落葉 六番右12（前掲「歌合大成」第八卷 二三四八頁）。

(9) 前掲「歌合大成」第八卷 二三四〇頁。

——やまざき・まさかつ、広島大学大学院博士課程後期在学——

〔附表〕 源仲正詠歌集成歌数一覽

多くを先学の成果に拠りつつ源仲正歌の集成を行い、その歌数を詠歌年次の順に排列した。その際、撰集類に収められた歌は、その集の成立を以て詠歌年次の下限としている。また、先行の歌合・歌集等に既に所収されているものは、重複歌として括弧に入れて示し、最下段に実数を示した。なお、歌合の欄の網かけ数字は、その歌合が『夫木抄』等からの本文拾遺であることを示している。

およその成立年次	歌合・撰集名	入集歌数	実数
長治元(二四)五月	俊忠歌合	3	3
永久元(二三)十一月	定通歌合	1	1
元永元(二八)六月	実行歌合	1	1
保安四(二三)以前	俊忠歌合	1	1
天治二(二五)	二度本金葉和歌集	2	2
(大治二(二七)	三奏本金葉和歌集	2	2
大治三(二八)八月	顕仲西宮歌合	1	1
大治三(二八)九月	顕仲住吉歌合	1	1
長承三(二四)六月	為忠歌合	3	3
長承三(二四)九月	顕輔歌合	3	3
長承三(二四)	為忠家初度百首	100	100
保延元(三五)八月	家成歌合	2	2
保延元(三五)	為忠家後度百首	100	100
保延二(三六)三月	家成歌合	1	1
仁平元(二五)	詞花和歌集	1	1

仁平年間(二五)二(五)	和歌一字抄	9
久寿二(二五)	後葉和歌集	3(1)
保元二(三)二(五)二(五)	袋草紙	1(1)
永万元(二五)	統詞花和歌集	3(1)
寿永元(二八)	月詣和歌集	3(2)
文治三(二八)	千載和歌集	7(4)
文暦元(三三)	八雲御抄	2(1)
宝治二(三四)	万代和歌集	3
乾元元(徳治三)三三(三三)三三(三三)	拾遺風林抄	1
延慶二(三三)	夫木和歌抄	201(51)
正和元(三三)三三(三三)三三(三三)	玉葉和歌集	1(1)
貞和二(三三)	風雅和歌集	2
貞治三(三三)	新拾遺和歌集	2
貞治三(三三)以降	六花和歌集	25(19)
応永四(四三)	和歌所へ不審条々	3(3)
応永十九(四三)	落書露頭	1(1)
寛文十二(六七)	後撰夷曲集	4(4)
享保元(七六)	三勇和歌集	67(61)
計	四〇八首	6

近世末期

源仲正集

国会図書館本 二四(三六) 三五
 彰考館文庫本 二四(四一) 三